

## 再び、事故のない探検部を目指して

探検部21代OB

探検委員長 安川 晶 浩

6月26日（金）の夜、『中国岷江航行遠征隊』隊長の岩根君より、自宅へ電話が入り、「ボートが転覆し、村上君が行方不明！」という連絡を受けてから、早や5カ月が過ぎようとしています。村上君の御家族、学校・クラブの関係者の「生存だけは——」という願いも空しく、6月30日（火）、村上哲也君は、遺体で発見されました。

私自身、部の探検委員長として、また、実質的に、この遠征隊を派遣した責任者の一人として、このような事故により、村上君という一人の尊い命をなくしたことは、無念でならないと共に、御遺族の方々には、深くお詫び申し上げます。

さて、今回の計画は、もともと1984年4月、部内で中国のチベット高原を貫流するヤルツェンボ河を下ろうという話が発端でした。その後、中国側と何度も交渉した結果、翌年の7月に、四川省を流れる岷江を下らないかという中国側の提示により、3年後に実行に移せたものです。

6月11日、村上君を含む隊員5名は、成田発上海行の飛行機で中国入り、6月17日、岷江上流部の漳腊より航行開始、事故は、航行開始してから9日後の6月26日午後1時35分に起こりました。

私自身、事故発生2日後に、村上君の叔父の川上さんと共に現地入りし捜索活動に入りました。現地の河の状況は、我々が日本で予想していた以上の激しさで流れると共に、あちこちに巨大な貯木場があり、捜索活動の範囲は時間の経過と共に、どんどん広がります。我々は、岷江での事故を、沿岸の人々にラジオ等を通して広範囲に連絡してもらおうと共に、岷江に流す木材の9割が集積するという貯木場に的を絞って捜索しました。が、我々の捜索も空しく、6月30日、村上君は、転覆現場から約100km下流の温江近くの中洲にて遺体で発見されました。

捜索に対して、中国側は最善の協力をしてくれました。地元の公安局、外事弁公室はもちろんのこと、特に村上君と約2週間寝食を共にした中国側協力隊員（連絡官、通訳、運転手）と受入先の中国国際体育旅游公司与成都旅游公司の御協力には、頭が下がる思いです。この紙面をお借りし、深く御礼申し上げます。

さて、今回の事故の原因を考えた場合、「これが原因だ！」と断言できるものは何もあります。ただ、遠征隊員にも、遠征隊を派遣した側にも、計画に対し、一人一人に少しずつ甘さがあったように思えます。各人の計画に対する、こだわりが、少しずつ不足していたように感じます。また、もう一点感じるのは、探検技術（精神的な部分も含め）の伝承（先輩から後輩へ）が、最近あまりなされていないのではないのでしょうか。つまり、かつての関西大学探検部が国内の最高水準にあった時代の探検精神と技術が現在希薄化しているのではないのでしょうか。これは、覇者の驕りからくるものかもしれませんが、全員が、戒めなければならない問題でありましょう。探検活動は、常に何らかの形で危険を伴うものであります。が、この危険を、日頃の絶ゆまぬトレーニング、地域研究、装備の研究という徹底した計画へのこだわりと、自然に対する真摯な姿勢により回避するものです。

「あの時、ああしとけば——」なんて言葉は、聞きたくありません。常に、各人が計画に対し徹底的に、こだわりを持ち続け、再び事故のない関西大学探検部を目指して、現役・OBそして先生が一体となって再出発しようではありませんか。